

大正街歩き、渡船に乗って沖縄の風を感じる (大阪)

午前10時JR大阪環状線「大正」駅に集合。参加は男性15名、女性5名でした。関西は1週間前の月曜日朝強い地震に見舞われ、この日の挨拶は先ず、安否を尋ねる事からでした。猫の目のように変わる梅雨空も、幸いにも良い方によって、雨のち曇りのち晴れ。結局この日の最高気温は28度、湿度56%、海からの風が心地よい燦歩日和になりました。

大阪市大正区は地図で見ると、枝から下がる一寸曲がった茄子の様な形をしています。区の名の元になった大正橋も、大正駅も、そのナスの上端=ヘタに当たる所にあります。

大正区の土地は、木津川が運んで来た土砂が堆積した洲を、江戸時代に田畑として開発した所ですから、殆どが平らです。その中で1カ所だけ高い所、中央の昭和山にまず向かいます。木津とは文字通り「木の港」、古く飛鳥時代に四天王寺造営の木材を運び上げたと言われ、近代には市場、貯木場として木材の流通運搬・貯蔵の要でした。その貯木場が移転した跡地に、港の見える公園を造る事になりました。1970(昭和45)年の事です。大阪万博に向けて工事中の地下鉄工事の残土170万 m^3 (ダンプカー57万台分)を積み上げて山が生まれました。標高は33mで、大阪市内で2番目に高い山です。さすがに見晴らしが良く、午後を訪ねる予定の千歳橋と渡船場も見晴かす事が出来ました。



大正区は東西を大阪湾に注ぐ木津川と尻無川とに囲まれています。周辺とは多くの橋で結ばれていますが、また生活上の交通手段として、渡し船が生き続けている街です。大阪市に8カ所ある渡船の内7カ所が大正区にある程です。

(他の1カ所「天保山渡船」は昨年5月の燦歩会で乗船しています。) この地域の川はいずれも大きな船が通行する為、橋は海面から30m以上もある高架で、歩行者や自転車には不便なためです。渡船は大阪市営で運賃は無料、自転車を牽いて乗る事も出来ます。

昭和山を東へ下り木津川に出ました。「落合上」渡船場で、対岸の西成区に渡ります。

川幅は100m、乗船時間は2分程でした。

日曜日の日中、運航は毎時4往復です。昨年度の統計では、1日平均484人が利用したという事です。

木津川沿いに南に下り、この日二つ目の「落合下」渡船場からまた大正区に戻りました。



熱中症の予防のために、涼しい木陰で休息します。

平尾亥開（ひらお いびらき）公園です。

18世紀の後半に平尾与左衛門の手で開発された平尾新田のこの辺りは、「亥」の年に開発されたことに因んで「亥開」と呼ばれてきました。ここにはもう一つの歴史があります。



1908（明治41）年に新設されたペスト患者隔離所が、翌年の「北の大火」と呼ばれる火事で罹災した人々の避難所として活かされます。延べ2万2千人の市民を収容し、所内には小学校も開設されたという事です。そして、1914（大正3）年、第1次世界大戦で捕虜となったドイツ人たちが、日本国内12カ所に収容され、この地の「大阪俘虜収容所」では、軍人など760人が暮らしました。朝夕2回の点呼以外は、比較的自由な生活を送っていたようですが、この収容所は3年後に閉鎖され、捕虜たちは広島に移されます。

公園には、音楽を楽しむ捕虜たちの写真やドイツ語の説明付の案内板が建てられていました。



3つ目の渡し場は「千本松」渡船場。江戸時代、この辺りは見事な松原で、三保松原、天橋立にも並び称される程だったそうです。

川幅も230mと広くなり、橋は二重のループで高みに上がり、川を

またいでいます。ドローンで上から見下ろせたら、きれいなメガネ型をしている事でしょう。それとも知恵の輪型？ 私たちは、渡船で木津川を渡り、乗ったまま、大正区に戻りました。



さてこの日のもう一つのテーマは「沖縄」です。大正区では近代、広い土地があり、港に近いなどの好条件を活かして、繊維産業そして鉄鋼などの重工業が盛んになります。一方不況・食糧難に苦しんでいた沖縄では、有毒なソテツの実や幹まで口にせざるを得なかった事から、「ソテツ地獄」とも言われたほど。そんな中で、多くの方が大阪に出稼ぎに来たのです。いま大正区では、住民の4分の1は沖縄に所縁があるといわれ、町は「リトル沖縄」とか「オキナニワ」と呼ばれています。沖縄料理の店、食材や名物を売る店、沖縄民謡・踊りの教室など、沖縄の風も吹いているようです。そんなお店で昼食を頂く事にしていました。その前に、全員撮影です。



昼食の間に、舞台では島唄のライブ演奏も始まり、会員も飛び入り出演です。



昼食後は、昭和山の上から眺めた千歳橋・「千歳」渡船場に向かいます。大正区の中に抱え込まれ、尻無川に向かって開いている「大正内港」の縁を回ります。はしけが埠頭に並び、緑地にはテニスに興じる若者、バーベキューを楽しむ人々の姿がありました。千歳橋はその内港の出入り口に架かっています。



ここでは4カ所目の渡船にこだわる組と、橋に昇って高さを体感する組に分かれました。頭上、自動車が轟音を立てて、千歳橋に向かいます。私たちはひたすら階段を上ります。（下りに数えた所170段でした。）橋からの眺めは爽快でした。

朝登った昭和山の遠景です。



最後の「甚兵衛」渡船場をチラ見して、すぐ上流の尻無川水門に向かいました。高さ45mのアーチ型の水門で、台風などで大阪湾から押し寄せて来る高潮をせき止める為のものです。

いざと云う時は、中央のアーチが手前に回転して来て、水を止める仕掛けです。この辺り、道沿いに洪水を防ぐための頑丈な防潮扉が多く見られ、川と人々の暮らしの近さが感じられました。

大阪ドームを正面に見ながら大正駅に戻り、15時半に無事解散しました。



（買い出し燦歩会としては、もちろん沖縄物産の店にも立ち寄りました）

* * *

相変わらずの補足・蛇足で失礼します。

1 「大正」区は「昭和」生まれ

港区から分かれて、大正区が生まれたのは1932（昭和7）年の事ですが、では、なぜ「大正」区と名付けられたのか？ それは区の北の端に大正橋があったからです。当初「大正橋区」という案もあったようですが、長すぎるといわれ、大正区になったとか。

因みに、大正橋は1915（大正4）年に架けられました。生粋の大正生まれです。

地域の工業地帯と大阪市街地を結ぶために架けられたものです。

アーチの両端の距離が91.4mという巨大な鉄橋で、当時日本一のアーチ橋でした。幅は19mで、市電が走っていました。

橋は地域の工業化、近代化の象徴だったのです。

ところが橋梁技術が発展途上だったため、変形が起きて、

補修・補強が繰返され、1974（昭和49）年に今の2代目に架け替えられました。



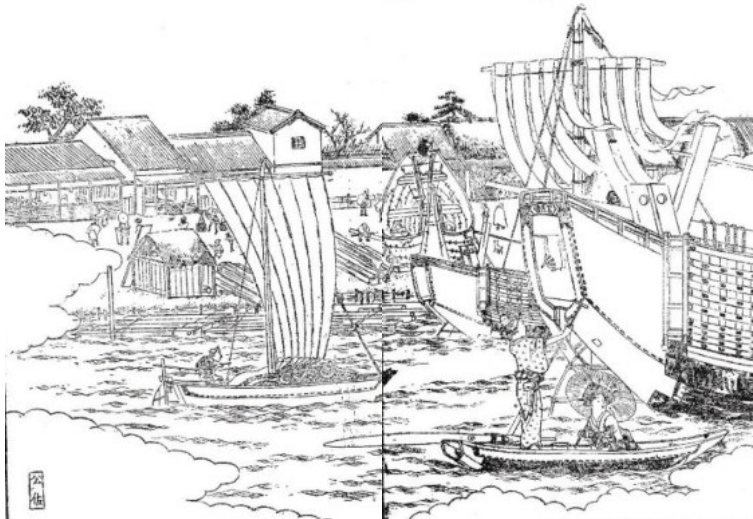
一方、大正駅の設置は1961（昭和36）年の事、この時に大阪環状線が一つにつながり、文字通りの環状線（ループ）になったのです。

ちなみに、JR大正駅の発車メロディは沖縄民謡「ていんさぐぬ花」です。

2 大地震 両川口 津浪記（だいじしん りょうかわぐち つなみき）の碑

江戸時代は大正橋のあるあたりまで、海から大船が遡って来て、物資を下ろし、大阪の街に運び入っていました。摂津名所図会大成には、「朝に千艘の出船あれば夕に千艘の着船あり」と賑わいを伝え、寺島の入り江の様子を描いています。地名は変わり今日の千代崎、大阪ドームのあたりといった方が分かりやすいかも知れません。

余談ですが港の賑わいを象徴するかのよう、綺麗な御姐さんらしき方の姿も右下に見えますね。



かつて入り江だったあたり、大正橋の東詰めの舗道に、高さ2mほどの石碑が建てられています。

大阪市文化財「大地震 両川口 津浪記」の碑です。

彫られた文字の所が、黒々と読まれます。

「大地震」とは、1854（嘉永7・安政元）年の

「安政東海地震、安政南海地震」の事です。

（嘉永から安政への改元は11月27日にされますが、

この地震が改元の大きなきっかけになった事などから、

翌年の「安政江戸地震」も含め「安政地震」と総称されています）

「両川口」とはこの地を挟んで大阪湾に流れ込んでいた木津川と安治川（あじがわ）の事です。



抜粋で碑文の大意をご紹介します。「11月4日午前8時ごろに大きな地震が起きた。空き地に小屋を懸け、また年寄り等は、多くは小舟に乗りこんで避難していた。ところが翌日午後4時ごろ再び大地震が起きて、家々は崩れ火災が発生、収まったかと思うと、雷のような音が響き、日暮れ頃津波が押し寄せてきた。安治川はもちろん木津川は特に激しく、山のような大波が立ち、両川筋に居合わせた大小多数の船の碇綱は切れ、川筋をさかのぼり、多くの橋を押し崩してしまった。溢れた水に逃げ惑い落ち込む人もあった。川岸に作った小屋は大船に押し潰され、その轟音や人々の声、助ける事もならず、水死する人、怪我する者夥しかった。

安政の今から顧みて148年昔、宝永4年の大地震の時も、小舟に乗って津波で溺れ死んだ人が多かったと云う。年月が過ぎ隔たると、伝え聞く人は稀になり、また同じ所で犠牲が出てしまった」として、「大地震の時、絶対に船に乗ってはならない」と戒め、次のように結んでいます。

「追悼の為、ありのままを、拙い文章だが記しておく。心ある人は、年々碑の文字が読み易いよう墨を入れ、伝えていって欲しい」津波の翌年1855（安政2）年7月に有志の手で建てられたこの石碑には、今も毎年地蔵盆の時に、地元の方々の手で墨が入れられているという事です。

安政南海地震の津波は、あの「稲むらの火」でも知られた津波です。碑文にあるその昔の宝永地震もこの安政南海地震も、南海トラフの引き起こした地震といわれています。

南海トラフ地震は私たちにとっても喫緊の課題です。

周期は100～200年とも、マグニチュードM8～9クラスの地震が、30年以内に70～80%の確率で起きるともされています。（文部科学省 地震調査研究推進本部）

「大地震両川口津浪記」の碑の文字は、今も私たちに警鐘を鳴らし続けているのです。

* * *

ご案内

旧友会員の方、職員の方、入会大歓迎です。入念な下見を行い、中途離脱も可能なルートを設定して、**毎月第4日曜日**に歩いています。メンバーはおよそ50名、その日の都合と体調に合わせて自由参加です。（事前に予約が必要な場合もあります）

今後の予定 7月 光秀ゆかりの福知山城と御霊神社を訪ね、由良川で治水の歴史を学ぶ
（青春18切符を利用 京都）

8月 暑さを避けて 休会

9月 六甲の自然を取り込んだ広大な神戸市立森林植物園を楽しむ（兵庫）

10月 京都トレイル第2回 伏見稻荷から蹴上へ（京都）

11月25・6日 若狭・三方五湖と鯖街道を歩く（1泊2日のツアー）

12月16日 納会（大阪）

1月 エキゾチック！世界宗教寺院めぐり（兵庫）

2月 日野ひな祭り紀行と町並み散策（滋賀）

3月 華岡青洲の里を訪ねる（和歌山）

参加ご希望の方は、山村恵一さんにご連絡下さい。（電話 0743-20-4159）

ご一緒に気軽に楽しく歩きましょう。

生島（おじま）幸弥 記